

表現・対話の基礎力を培う国語科授業

ー遊びの要素を取り入れた日常的活動を下地としてー

M14EP009

田中 和美

1. 課題の設定

小学校の教育現場において、自分の考えをうまく説明できずに戸惑っている児童の姿を目にする。児童の表現力を向上させたい、それが私の課題意識である。

昨年度は、「自分の言いたいことを適切に表現すること」「人に伝えるためにより豊かに表現すること」をめざして、どのような手立てが有効かという課題で研究に臨んだ。小学校低学年において国語科の授業を実践し、その成果として、「遊びの要素を取り入れた活動で、楽しみながら言語に触れることが、児童の言葉への関心や言葉を使う意欲を向上させること」、「日常で行う言葉遊びなどの活動が表現の素地となって、国語科の言語活動に生きること」、という知見が得られた（田中 2015）。

そこで今年度は、小学校第1学年を対象に、児童の「話すこと・聞くこと」に関する実態を把握し、昨年度の研究を継続して取り入れながら、表現に関わる基礎の力を培うことをめざして研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

現行の小学校指導要領では、「実生活で生きてはたらき、各教科の学習の基本ともなる国語の能力を身につける」とする中教審答申の基本方針を受けて具体的内容が示されている。どの教科においても「話すこと・聞くこと」は学習の基本となる。児童の「話す・聞く」場面に着目してみると、児童を取り巻く家庭環境や生活経験等々多くの要素に影響され、小学校入学の段階で、既に個人差が生まれている。話したいという思いのまま言葉が湧き出てくる児童もいれば、何か尋ねられても言

葉がひと言も出てこない児童もいる。相手の話したことを一度で聞きとることができる児童もいれば、自分の話したいことを言い終わると人の言葉が耳に入らない児童もいる。このような状況を踏まえ、「話すこと・聞くこと」を中心に、表現の基礎となる力を小学校低学年の段階で培うことが重要であると考えた。

前項で述べたように、昨年度の研究では「適切に表現すること」「より豊かに表現すること」をめざしたが、本研究では、小学校1年生の表現の実態をじっくり把握することから始めた。そして一方的に表現するだけでなく、言葉のやりとりをすることも重要であると改めて考え直し、「表現」に「対話」を加えることとした。小学校低学年の段階において、適切に話したり、友だちと対話したりする基礎を培いたい。昨年度の研究を参考に「遊びの要素を取り入れた日常的活動」を継続して行い、その活動を下地にして児童が生き生きと表現し、友だちと対話する国語科の授業を創造したいと考えた。

3. 研究の方法

実習校：山梨県内公立小学校

実習期間：2015年5月～12月

対象児童：第1学年A組 29名

(1) 児童の実態把握

① 日常場面での表現

② めざす児童像の仮設

(2) 遊びの要素を取り入れた日常的活動の実践

(3) 授業実践

実施教科：国語科（光村図書1年下）

実施単元：ふたりでかんがえよう

教材名「これはなんでしょう」

4. 研究の結果と考察

(1) 児童の実態把握

①日常場面での表現

小学校第1学年の児童は、大半の児童は話すことが大好きであり、「話したい、聞いてほしい」という思いが大きい。しかし、保育園や幼稚園とは環境が一変するため、緊張していたり、なかなか言いたいことを言い出せなかったりする児童が多いのも、小学校入学時の特徴とも言える。その上、いくつかの保育園・幼稚園から入学してきており、学習への心配・緊張だけでなく、友だちとの関係にも不安をもっている児童も少なくない。学校生活がスタートして2ヶ月程は、トイレに行くタイミングを逃してしまい、言い出せなくて失敗してしまう児童もいた。また、「お母さんに会いたくなっちゃった…」と泣き出す児童もいた。「話したい、聞いてほしい。」という思いのままにいつでも言葉が出てくる児童と、なかなか言いたいことを言えない児童の差が大きいことが分かった。入学して間もない児童の表現の様子については、日常の場面で見とろうと考えた。

日常場面の中で、一人ひとり話す機会があるのが、「朝の健康観察」である。児童の発言に注目し、表現の変化を見た。

児童は、まず「はい、元気です。」または「はい、具合が悪いです。」のどちらかを選択する。具合が悪い場合は、担任から「どんな風に具合が悪いですか。」と質問をする。児童は、それに答える。4月当初は、「頭が痛いです。」「鼻水が出ます。」等の短い表現が多く、怪我をした箇所を指し示して「ここが痛いです。」と言う児童も多かった。「そこは、ひじって言うね。」と教師が言い直したり「そこを何と言うか分かる人いるかな。」と児童全体に返したりすることで、自

分の身体の調子を話すのに必要な言葉を覚えていけるように心がけた。また、2つの内容を言おうとすると、「お腹と、咳が出ます。」という様に主述のつながりがおかしい文章になることが多かった。そのような表現があったときに、教師側が、「お腹が痛くて、咳も出るってことだね。」と言い直すことを続けると、徐々に適切な言い方をする児童が増えていった。これは、周りの児童がよく友だちと教師との言葉のやりとりを聞いている証拠である。1ヶ月も経つと、「はい、元気です。だけど、時々咳が出ます。」という言い方もできるようになった。これは、自分の身体の調子について、元気か、具合が悪いか、だけでは言い表せない自らの身体感覚を自覚し、自分なりに表現できるようになったと言える。

しかし、学校生活が半年経った9月に実施したアンケートの結果によると、29名のうち、3~4名は、「自分の考えをあまり話すことができない」「相手の話をあまり聞いていない」「友だちと意見を交換していない」と回答していた。「話したい」という思いが大きい1年生においても、自分は話せていない、聞いていないと判断している児童がいることが分かった。小学校に入学して、「学習」としての「話すこと・聞くこと」に抵抗を感じている可能性もある。「話すことができた、話をよく聞いた」と判断するには、そこにつながる「話すことが楽しい、聞いていて楽しい」という体験が小学校低学年の段階ではとても大切であると考えた。

②めざす児童像の仮設

昨年度から「表現力」に着目して研究を行っている。ただ一方的に表現するだけでなく、人と言葉のやりとりをすることも重要であると改めて考え直し、小学校低学年の段階において、「話す」「聞く」の切り替えをし、自分の言葉で表現したり、友だち

と対話したりする姿をめざしたいと考えるに至った。「対話(dialogue)」の中で、自分のlogos(ことば)も生成・洗練する。

その基礎として培いたい力として、

- ・自分の考えをもつことができる。
- ・自分の考えを言葉にすることができる。
- ・自己主張するだけでなく、相手の話に耳を傾けることができる。
- ・分からないことを尋ねることができる。
- ・話題に合った話ができる。
- ・自分と友だちの考えの異同が分かる。

といった事項が仮説的に挙げられよう。

昨年度の研究において、日常で行う言葉遊びなどの活動が国語科の言語活動に生きたことから、今年度においても、児童が「話すことが楽しい」と感じるような、遊びの要素を取り入れた日常的活動を継続して行っていくこととした。そして、その活動と国語科授業を関連させることで表現・対話の基礎を培うことをめざした。

(2) 遊びの要素を取り入れた日常的活動の実践

国語科の教材を精査してみると、話す・聞く領域の内容が非常に多い(光村図書)。質問したり質問に答えたりする内容が多く、2月には、クイズを二人で考える教材が設定されている。(表1)

これは、昨年度「遊びの要素を取り入れた日常的活動」として実践した「これは何でしょうクイズ」に非常に近い形のものであった。そこで、本研究では、「これは何でしょうクイズ」を参考にして、日常的活動を精選し継続して取り組み、この国語科単元の下地とすることにした。

6月には、説明文「くちばし」の単元で、「これは何のくちばしでしょう。」という問いをもとに、「これは何の耳でしょう」「これは何の目でしょう」等のクイズを教師から出題した。

表1 第1学年 国語科の教材(話す・聞く領域を中心に)

月	単元名・教材名	学習内容	参考
5月	えをみてはなそう	絵を見ながら、型に合わせて 読んだり、質問に答えたり する。	「なにが いますか。」 「さるが います。」 「どこに いますか。」 「きのう えに います。」
5月	ぶんをつくらう	「～が、～する。」という文型の文をつくる。	ぎつねが ほしる。 さるが おちる。 等
5月	わけをはなそう	気持ちを話したあとに、その歌を話す。	「わたしは～です。どうしてかという～からです。」
6月	くちばし(説明文)	「問い」と「答え」という文章形式。	「これは、なんの～でしょう。」 「これは、…の～です。」
6月	おもいだしてはなそう	最近の出来事を話す。	「いつ・どこで・誰と・何を・どうした」の観点
7月	たからものをあしえよう	たからものについて説明する。 ※生活科・図工 すぎなものなかに	グループ内で説明をし、 質問 に答える。
9月	はなそう、きこう なつやすみのことを はなそう	夏休みの出来事を話す。	話したあと、 質問 に答える。
9月	ひらがなあつまれ	言葉遊びを楽しむ。	例)しりとり
11月	ことばをみつけよう	言葉遊びを楽しむ。	例)かばんの なかに、 かみが いる。
12月	きいてしらせよう ともだちに、きいてみよ う	友だちのことを紹介するために、友だちに質問する。	質問 して、必要な情報を集める。
2月	ことばをたのしもう	詩や早口言葉を楽しむ。	例)きっとぎってかってきて
2月	ふたりでかんがえよう これは、なんでしょう	二人で問題を考えて、クイズ大会をする。	「これは、なんでしょう。」

その後、主に帰りの会の時間を使い、「これは何でしょうクイズ」を週に1回程度の割合で実践した。方法や目的については表2に示す。

表2 これは何でしょうクイズの概要

これは何でしょうクイズ

[方法]

- ①教師が写真を手元にもち、写っている物を隠したまま、ヒントを出す。
- ②児童が質問をし、教師が質問に答える。
- ③**5**つ程度(慣れてきたところで**3**つに限定)の質問に教師が答え、児童が正解を予想する。
- ④予想したものを発表し合い、自分が思うものに挙手をする。
- ⑤教師が写真を見せ正解を発表する。



[目的]

- ・ヒントや質問、質問に対する答え等、話の内容に耳を傾ける習慣・態度を身につける。
- ・質問ができるようにする。
- ・適切な質問を考えられるようにする。

取組を始めた6月の問答を例に挙げると、次のようである。

T：「これは、果物です。

さて、何でしょう。」

「質問をしたい人、いますか。」

S1：「いちごですか。」

T：「それには答えられません。」

S2：「…忘れました。」

S3：「赤いですか。」

T：「いいえ、赤くありません。」

S4：「何色ですか。」

T：「黄色です。」

S5：「どんな形をしていますか。」

T：「細長い形をしています。」



図1 これは何でしょうクイズで元気に挙手をする児童

クイズを始めた頃には、S1のように答えそのものを尋ねてしまったり、元気よく手を挙げるものの(図1)、S2のように何を質問したかったのかを忘れてしまい、「忘れました。」と言う児童がいたりして、雰囲気楽しさが優位であった。しかし、S3のように思った色を直接尋ねる児童や、中にはS4、S5のようにカテゴリーで「どのような……。」と尋ねることのできる児童も数名見られた。予想した回答の中には、「いちご」「りんご」などもあり、質問や質問の内容を全く聞き取れていない児童もいることが明らかであった。

クイズの取組を繰り返ししていくうちに、答えをそのまま尋ねる児童が減り、まわりの児童からも「その質問じゃだめだよ。」と

いう言葉も聞かれるようになってきた。

- ・何色ですか
- ・どんな形ですか
- ・どんなときに使いますか

等の質問が出たときには、「答えに近づくいい質問ですね。」と教師が声をかけるようにし、「友だちの質問をよく聴いていると、ヒントが増えていくってことだね。」と折にふれて言葉かけをしていくようにした。

すると、6月に「忘れました。」と言っていた児童が、9月には「どんな形ですか。」と質問できるようになり、変容が見られた。

とはいえ、9月の時点では「質問に対する返答を聞いていなかったであろう」と思われる回答は完全にはなくならず、「ヒントや質問、質問に対する答え等、話の内容に耳を傾ける習慣・態度を身につける」という点については継続してめざす必要があると感じた。

継続して行っても、児童たちはクイズ自体に飽きることなく、楽しい雰囲気を取り組むことができた。これは、成果の一つである。言葉のやりとりを楽しんでいることができ、教室であまり話せなかった児童が発言できるようになってきたことや、学校行事や児童会行事等、教室以外の場面でも質問を進んでできるようになったことにつながった。また、質問への意欲や、質問の内容の洗練は、国語科授業実践につながるものであった。

(3) 授業実践

単元「ふたりでかんがえよう」は本来2月の教材である(表1参照)。しかしこれを、日常的活動で継続して行ってきた「これは何でしょうクイズ」での経験を生かすこと、また事後の取組を継続し学習したことを日常に生かしていくことをねらい、12月の単元「きいてしらせよう」と入れ替え11月に実践することとした。指導案の一部

を掲載する。

①「単元を貫く言語活動」

1年A組「わくわくクイズ大会」を開こう

②教材名

これは、なんでしょう
(光村図書1年下「ともだち」)

③言語活動設定の意図

児童は、既習単元「くちばし」で体験した「これは、何のくちばしでしょう」のクイズ以降、日常的に「これは何でしょうクイズ」を経験してきている。このクイズは教師から出題するクイズで、楽しみながら継続して行うことで、聞く力や質問する力を高める目的で行ってきているものである。そのため、今まで児童は常に解答者であった。毎回、全員が楽しみながら積極的にクイズに参加できている様子から、学級でクイズ大会を開くことについては、全員の関心を向けられる。クイズに答える立場だけでなく、出題する立場にもなる楽しみを感じられるため、活動への意欲を高めることができる。

また、ペアを組んでクイズ大会に臨ませることで、問題づくりやクイズ大会での出題・解答のときに、友だちとの対話が生まれ、話題に沿って話し合う力を培うことができると考えた。

④教材の特徴

本単元は、話し合いに関する単元である。低学年では、互いの話を集中して聞き、話の内容を理解した上で、話題に沿って話したり聞いたりできるようにすることをねらいとしている。本単元は、「これは何でしょう」とクイズをする前に、みんなに出す問題と、ヒントとして提示する内容について、友だちと話し合うものである。この時期の児童は、クイズやなぞなぞが大好きである。そのため、ど

の児童も楽しく取り組める題材と言える。

⑤指導の目標

- ・互いの考えを終わりまで聞き、話題に沿って話し合うことができる。
- ・答えに迫るために質問をしたり、質問されたことに適切に答えたりすることができる。

⑥指導計画

(5時間 A領域「話すこと・聞くこと」)

時	主たる学習活動	研究に関わって
1	これからどのような学習をしていくのかを知る。	日常的に行ってきた「これは何でしょうクイズ」をして、雰囲気作りをする。
2 本 時	「わくわくクイズ大会」のために、友だちと話し合っ、問題を作る。	問題の出し方について、今まで経験してきた日常のクイズを取り上げて考えさせる。 ペアを組ませ、それぞれが考えた「もの」について、ヒントを相談させる。
3	質問を予想して、それに対してどう答えるか、友だちと話し合う。	質問を予想させるときには、今までに出た質問を思い出させる。 予想される質問に対して、どう答えるかをペアで相談させる。
4 5	1年A組「わくわくクイズ大会」で、クイズを出題したり、クイズに答えたりする。	あらかじめグループ分けをしてクイズの内容が重ならないようにする。 場所の設定を工夫して、2時間で全員できるようにする。
事 後	日常的活動を児童主体で行う。	問題作成用紙を用意し自由に書かせるようにする。 写真を教師が準備し、帰

	りの会の時間を使って、「これは何でしょうクイズ」を継続していく。
--	----------------------------------

このうち第 2 時に行った授業の実際を、次に示そう。

⑦本時の指導

日時：平成 27 年 11 月 24 日（火）

2 校時（9:35～10:20）

対象：1 年 A 組 29 名

目標：「わくわくクイズ大会」のために、友だちと話し合っ、問題をつくることができる。

授業の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	研究と関わって
つかむ 5 分	1 本時のめあてを知る。	・1 年 A 組「わくわくクイズ大会」を開くという目的を確認する。	・これはなんでしょうクイズを想起させる。
	ともだちとはなしあって もんだいをつくらう。		
考える 15 分	2 今までのクイズで出した問題を思い出す。 3 クイズに出したい「もの」を考える。	・仲間分けができるか、児童に投げかける。 ・一つ決めて、ノートに書かせる。 ・なかなか決められない児童には板書を参考にさせる。	・今までのクイズで使った写真を用意する ・児童の言葉で仲間分けをする
	4 問題のつくり方を知る。	・例をあげ、ヒントを 2 つ考えさせる。	
	5 ペアで、それぞれ考えたもの	・対話の仕方（やりとり）について例を示す。	

過程	について 学習活動	指導上の留意点	研究と関わって
深める 20 分	どんなヒントを出したらよいか、対話する。	・声の大きさについて、声の大きさで確認する。 ・2 人で相談して決まったヒントをノートに書かせる。	・児童 1 名と教師とで対話の例を見せる。
まとめる 5 分	6 「今日の学び」を書く。	・問題のつくり方で気づいたことを「今日の学び」とする。 ・書けない児童には、ペアで対話した感想を書かせる。	

評価規準

- ・物の仲間分けを理解し、一つ目のヒントを考えている。
- ・ヒントについて自分の考えを話したり、友だちの考えを聞いたりして、進んで対話している。

⑧授業実践の成果と課題

[成果]

- ・第 1 時に「これは何でしょうクイズ」を行い、日常的活動で行ってきたクイズを想起させることで、担任がしてきた出題を今度は自分がするというイメージをもたせることができた。クイズ大会に向けて題目をみんなで作り、「わくわくクイズ大会では、今度は自分たちが問題を作って楽しもう」という雰囲気づくりができた。
- ・本時の導入に、自分たちで作った題目「1 ねん A ぐみ わくわくクイズたいかい」を提示して第 1 時を想起さ

せ(図2)、スムーズに「問題を作る」というめあてを確認することができた。



図2 本時の導入で、提示した題目

- クイズを出題するときにも大切になる「仲間わけ」について、日常行ってきた「これは何でしょうクイズ」で使用した写真を掲示し、児童から出てきた言葉を取り上げたことで、視覚的にも分かりやすく仲間分けをすることができた。また、児童が発言した「仲間分け」を、学級全体に返しながら板書することができた。具体的な場面を挙げると、鉛筆やはさみの仲間分けである。どのような仲間になるか尋ねると、「文房具」という発言があった。「文房具」とは何のことが学級全体に問うと、「お勉強に使うもの」という返答があり、更に、みんなが普段どのような言葉で言い表しているか尋ねると「勉強道具」という答えが返ってきた。それらは全て写真の近くに板書した。(図3)

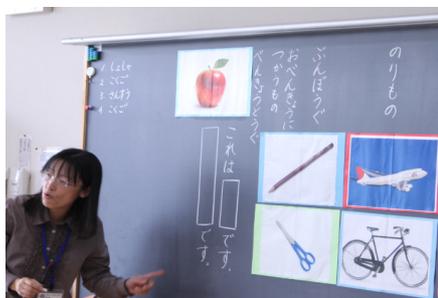


図3 「仲間分け」の板書

- 日常場面での表現の実態を考慮し、なかなか話せない児童と、言葉がスムー

ズに出てくる児童とが組むような座席にしたことで、全く対話が進まないというペアがなかった。一生懸命「どう?。」と相談できているペアが多く見られた。(図4)



図4 クイズのヒントを相談する児童

- 「今日の学び」の記述には、友だちと一緒にクイズを作ったことへの喜びや、質問のやりとりができた楽しさが多く見られた。(図5)

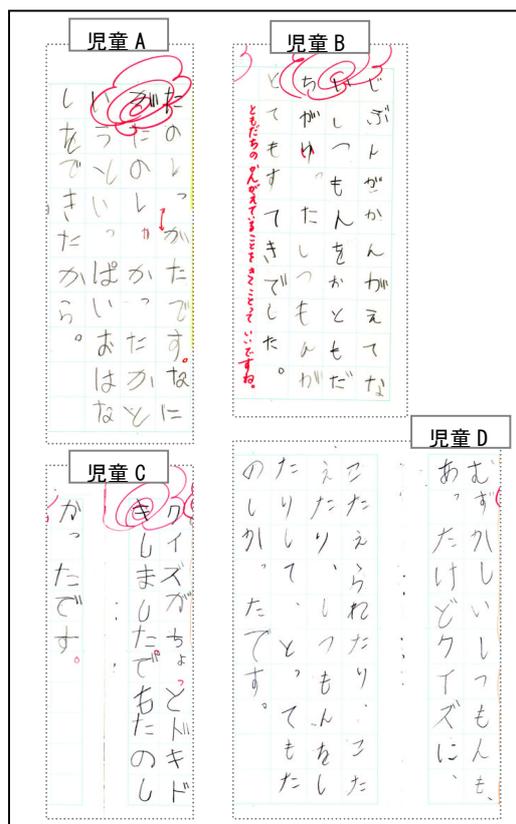


図5 児童のノート記述

- 図5に取り上げた児童Aは、普段もな

なかなか言いたいことが言葉にできない児童であったが、「たのしかったです。なにがたのしかったかというといっぱいおはなしをできたから。」と、みんなの前で話ができたとの喜びを表出している。ノート記述から、このような変容も見てとることができ、児童らが進んで友だちとの言葉のやりとりをしたと判断できる。

[課題]

- ・小学校低学年にとって、「別の立場になって予想すること」が難しい。第3時に、出題するクイズに対する質問を予想させたが、自分自身が既に答えを知っているため、答えを知らない人からどのような質問をされるかを考えることがなかなかできなかつた。これには、丁寧な指導の段階が必要である。
- ・友だちに「話したい、聞いてほしい」という気持ちが根底にあることが大事であるが、そのような気持ちになるような課題設定が難しい。児童がどのような話題に興味をもっているのか実態を把握しておくことや、教師同士で児童の意欲や自主的活動が大きくみられた言語活動例について、情報を共有することが必要である。

5. 研究の成果と課題

本研究では、クイズのようにゲーム感覚のできる日常的活動が、言葉を使うことに対する躊躇を和らげ、積極的に話したり言葉をやとりしたりする意欲につながった。また、ヒントを聞き取ろうとするため、友だちの質問やそれへの答えにも耳を傾ける状況が生まれ、聞く姿勢の基礎を培うことができた。そして、日常的活動と国語科授業とを関連させることで相乗効果が生まれ、ペアでの対話においては、話題に沿って話

すことができ、自己主張するだけでなく、相談する姿勢をもつことができた。

また、国語科の授業以外にも、分からないことを進んで質問することができるようになり、日常的活動で継続してきたことが別の効果にもつながっている場面も見られた。

これらのことから、小学校低学年の段階において、遊びの要素を取り入れた日常的活動を継続的に行うことは、言葉のやりとりを楽しむ気持ちを味わい、話そうとする意欲を湧かせることができること、そして、その活動を計画的に行い、国語科授業の下地にすることが、言語活動をスムーズに行うための手立てとして有効であることが明らかとなった。表現・対話の基礎力を培うためには、日常的に遊びの要素を取り入れた活動を繰り返し行い、国語科授業と組み合わせ「学習」へとスムーズに導いていくことが必要であることが分かった。

小学校低学年に留まらず、中学年・高学年においても、言語活動の活性化につながり、表現力を向上させるような日常的・継続的な活動が必要であると考えられる。本研究では小学校低学年を対象としたため、その系統性が課題として残った。

今後、効果の見られた日常的活動については共有化を図り、中学年・高学年への系統性も検討しながら教育課程に組み入れて実践していきたいと考えている。

参考・引用文献

- ・文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説国語編 (平成 20 年 8 月)」東洋館出版社
- ・田中和美 (2015) 「適切により豊かに表現する力の向上をめざして—小学校低学年における適切な言語表現へのステップ—」山梨大学教職大学院教育実践研究報告書